

関東整形災害外科学会月例会

第 606 回 整形外科集談会 東京地方会 演題

興和ビル 11 階大ホール 2001 年 2 月 24 日 (当番幹事 群馬大)

0011

【座長 篠崎 哲也】

0010

1. 臓器特異的転移をきたした軟部悪性線維性組織球腫の 1 例

群馬大整形外科

足立 智・篠崎 哲也・渡邊 秀臣
柳川 天志・高岸 憲二

皮下組織へ特異的に転移する軟部悪性線維性組織球腫 (MFH) の 1 例を経験した。症例：61 歳男性。右下腿の皮下腫瘍を近医にて単純切除されたところ病理組織診断で MFH と判明した。その後、当科を紹介受診し、大腿皮下に局所再発が 2 回生じた。広範囲切除術後に、局所再発は消失したが、1 年以上経過後に右大腿内側皮下に腫瘍が発生した。これも前回同様に病理組織は MFH であり、このとき肺やリンパ節などに転移はなかった。悪性腫瘍の多発発生では、それが臓器特異的転移か同時発生かの鑑別が重要であるが、それぞれの腫瘍の発生時期が数ヶ月以上離れていること、原発巣と右大腿皮下の部位が離れていることより、皮下への臓器特異的転移と判断した。

質問 栃木県立がんセンター 矢澤 康男

特異的転移と言うより、局所再発の後に、初発遠隔転移が皮下にあったとすべきではないでしょうか。

回答 群馬大 足立 智

通常 MFH では、皮下転移が生じている時期には肺やリンパ節への転移が認められているが、今回、それらがなく遠隔皮下組織にのみ転移がみられたことから、今回の MFH 症例が特異的な転移を示していると考えた。

補足 群馬大 篠崎 哲也

MFH が転移を生ずるとすれば、皮下だけではなく、肺やリンパ節などにも同一確率で生ずると考える。本例では皮下に発生し皮下に転移した当時、他臓器には転移はなかった。このような事実より臓器特異的転移と考えた。

2. 左鎖骨近位端に発生した骨軟骨腫の 1 例

東女医大整形外科

萩原 洋子・中野 裕貴・金 強 中
池田 和男・加藤 義治・伊藤 達雄

症例：49 歳女性。主訴は左鎖骨近位部の腫脹。1998 年ごろより左鎖骨近位部の腫脹に気付くも放置。1999 年夏ごろから徐々に増大。2000 年 5 月に某医での鎖骨 X 線像にて異常陰影を指摘され、MRI を施行後、腫瘍を指摘され当科に紹介受診となった。入院時、腫瘍の大きさは 3×5 cm で弾性硬、境界明瞭で辺縁スムーズであり、皮膚との癒着なく可動性良好であった。単純 X 線像では左鎖骨近位部に隆起性の骨硬化性病変があり、MRI 所見では T1 強調で低信号、T2 強調では内部は不均一に等信号から高信号であり、造影 MRI では一部に造影効果も認められた。血管造影では淡い腫瘍濃染像を認めた。鑑別診断として骨軟骨腫、軟骨肉腫などを考慮し、生検術を行なった。病理所見より骨軟骨腫と診断された。切除術では一塊切除を行なった。骨軟骨腫の鎖骨の発生例は全体の 0.5% 程度である。今回われわれは鎖骨の近位端に発生した稀な骨軟骨腫の 1 例を経験した。

質問 群馬大 渡辺 秀臣

①MRI では軟骨病変は T2 で高い信号が得られると思いますが、軟骨組織はどちらから得られましたか。

②軟骨キャップはみられませんでしたか。

③内軟骨腫という可能性はいかがでしょうか。

3. 多数の米粒体を伴った慢性肩峰下滑液包炎の 1 例

獨協医大整形外科

滝澤佳江子・玉井 和哉・浜田純一郎
大野 弥・小口 泰司・高井 盛光
早乙女絏一

(抄録未着)

質問 杏林大 望月 一男

Bursal chondromatosis とはどのように鑑別しましたか。